



私たちは品川区の五反田にある清泉女子大学に通っています。大学で学ぶことその他、地域での貢献活動を行う中で様々な団体の活動に出会い、一緒に活動するようにもなりました。フェアトレードの啓発や地域での清掃活動、絵本の読み聞かせや手話歌コンクール。様々な分野での活動がありますが第7号製作は「医療・福祉」を特集として品川区区内で取り組まれている団体を、ボランティアセンターSeo スタッフ地域チームと、地球市民学科 基礎演習Ⅰ 辰巳先生、池部先生グループの学生で担当しました。



教育サポートセンターNIRE

NPO 法人教育サポートセンターNIRE では、主に精神疾患を持つ、困難を抱える子ども・若者の学習支援や自立支援を行っています。勉強を教えることだけでなく、学校を居場所にするために行事を通しての仲間づくりに力を入れています。

NIRE の若者支援にはフリースペースがあり、ボランティアを募集しています。私はボランティアと聞き、何を手伝えればよいのか尋ねると、ただ一緒に話をすることで良いのだという答えが返ってきました。他の人にはできないことが自分にはできない。誰にでもあることですが、自分から助けてほしい、教えてほしいと発信することが難しく、それが原因で殻を作ってしまう、ひきこもりがちになってしまうのだそうです。しかし、仲間と自分の経験を共有することで、経験者の話を聞き挑戦することができたり、次第に心を開放できるようになったりします。大切なことは「何かしてあげる」ことではなく「同じ生きづらさを共有する」こと。「同じ生きづらさを共有する」という姿勢は「何かしてあげる」こととは違い、こちらから一方的に何かするのではなく、同じ目線で双方が考えを出し合うことです。「何かしてあげる」という視点では気付くことの出来ない、利用者の考えや想いを感じ取ることができ、ひきこもりや鬱、知的障害などへのこれまでの考えを、払しょくする機会となるでしょう。

団体 HP : <http://npo-nire.org/>



心身障害者福祉会館

品川区心身障害者福祉会館は身体、知的、視覚、聴覚、重度重複、高次脳、肢体不自由の障害を持つ方々が主に利用しています。会館では自立訓練を行っており、利用者の方は目標が明確で、ご家族も本人も昔できていたという気持ちが強くあります。そのため、今できないということで気持ちが落ち込むこともあり心のケアが重要で、退院から生活に密着し実生活と結びつけた支援が必要とされています。また、会館ではミュージックセラピーを行っております。利用者の方にはこの音が苦手と

いうことがあったり、音楽によって何かできたりと、一人ひとりに適した対応が求められるため、人手が必要だそうです。楽器でマッサージできるものもあり、音に敏感でない利用者も楽しめる工夫がなされています。中には音を聞きたいという気持ちから、動かなかった手が動くという方もいらっしゃるそうです。

私は今回の取材で、初めて心身に障害をもつ方々の生活を拝見しました。職員の方は常に笑顔で利用者の方と接していました。驚いたことに、職員の方は会ってすぐ彼らの体調や機嫌がわかるのです。彼らはとても明るく私に挨拶をして、一生懸命に自分のことを伝えてくれました。私も彼らが一生懸命に伝えようとしている思いを受け止めようと、コミュニケーションをとりました。職員の方のようにスムーズにはいかなかったものの、彼らの意思を読み取ることができ、非常に嬉しかったことを覚えています。



左写真 NPO 法人教育サポートセンターNIRE の矢沢さん

右写真 品川区心身障害者福祉会館

か も め 園

かもめ園は身体障害や知的障害を持つ利用者個人に合わせた食事、入浴、買い物、旅行、趣味的活動などを支える施設入所支援事業を行っている施設です。職員の方に気を付けていることを伺うと、生の声を聞き、気持ちをくめるようにすることだとおっしゃっていました。守る対象として考えると自分のペースになってしまい、相手がどのような気持ちで生活しているのかわからなくなってしまいます。ですが、相手を支援し知ることでチームワークが生まれます。一人で考えず様々な視点から見ることで、相手の言えないことをくみとり寄り添うことが大切なのだそうです。

(次ページに続く)



インタビューした中で最も印象に残っている言葉があります。それは、「接するうえで相手の気持ちがわかり、共感しあえる。元気な人にわからない視点、気付き、生き方、考え方がある」というものです。障害者の方が自分のできる仕事を真剣にこなす姿は、目を見張るものがあります。長年仕事を続けていくうちにコツをつかみ、その人にしかできない絶妙な加減で調節しているという話も伺いました。私たちは自分たちの感覚や考えが当たり前、普通だと思っただけではないでしょうか。障害者に限らず私たち一人ひとり、見ている世界は違います。健常者や障害者という枠ではなく、個性を持った一人の人間として接することの重要性を考えさせられました。

トット文化館

トット文化館では、聴覚障害者の方々日々作業や作業訓練を行い、自立を図るための支援をしています。作業内容は簡易作業、農園園芸作業、自主製品作成です。農園では、春はさやえんどうやにんにく、夏は茄子、トマトなど無農薬で栽培しており、地域の方からも大変好評のようです。職員の方は、地域や企業、学校からの協力があり、非常に助かっているのだと話していただきました。自主製品は、英字新聞バッグやブックカバー、トートバッグなどを作成しており、大井町のイトーヨーカドー6階の福祉ショップ「テルベ」という店で新聞バッグを販売しているということです。地域の方はお互い様という気持ちで見守ってくださり、防災訓練などは町会と協力して実施しているそうです。

トット文化館では、公益事業として日本ろう者劇団による演劇活動を行っています。昔はろう者が劣っている、手話をするのはみっともないという時代があったそうです。聞こえないということは目に見えないため、障害があることを知らない人が多く、手話をするのが珍しいという目で見られていました。「ろう者が芝居をすることで、聞こえない人はフォローがいるという考えを壊したい。」という言葉が強く印象に残っています。私はろう者と話をすることが初めてでした。手話についての知識もなく、職員の方に手話通訳をしていただきながらの取材でしたが、目を見ていると不思議と何を伝えたいのか感じ取ることができたのです。「日本人は手話がわからないと避ける。手話は覚えることよりもコミュニケーションの幅を広げることに意味がある。心を広く持つて。」この言葉を聞き、私は自分もその一人であったのだと気付かされました。実際に接してみないとわからないことばかりで、コミュニケーションの手段も人それぞれなのです。



音を使わずに全身を使って感情を表現する手話狂言の公演が2015年1月31日、2月1日に行われます。例年、非常に多くの集客があり評判だそうです。手話やろうりに関しての興味や関心が少しでもある方は、足を運んでみてはいかがでしょうか。

団体HP：<http://www.totto.or.jp/indextotto.html>

品川図書館

みなさんは品川図書館に点字図書や録音図書があることをご存知でしょうか。現在、品川図書館でそれらを利用している人数は50人ほどで、点字は読めるが録音図書を利用するという人が増えているそうです。利用者は年配の方が多く、若者へ浸透させることを思案中とのことでした。点字図書や音訳図書は全国で相互に貸し出しを行っており、そちらがメインとなっていると伺いました。録音図書を録音機器に吹き込むことを音訳と言い、ボランティアがあるそうです。録音には半年ほどかかり、録音図書を一冊読むには約7時間かかります。最近ではカセットテープからCDへ移行され、CD化されたことで本のように飛ばして読みたいところから読むことが簡単にできるようになりました。専用の再生機器を使えばしおりを挟むこともでき、読むスピードも変えることができるため私たちが本を読むのと変わらないと感じました。

私は取材で初めて録音図書の存在を知りました。録音図書は聞くだけでなく、パソコンで文字を追いつながりながら聞くタイプのももあります。また、専用の再生機器は操作方法を音声で案内してくれるため、非常にわかりやすく「読書を困難にしているものをどのように改善していくか」まさにこの言葉の通り、盲者の意見を聞きながら考えられたものなのだと感じました。



むつき会

むつき会では点字の絵本を作製しています。点字の絵本とは絵本の絵の部分張り絵、文字の部分文字と点字で表したものです。一冊を完成させるのにかかる時間は、個人差がありますが約半年～8カ月だそうです。点字の絵本を作ろうと思ったきっかけは、絵本のおもしろさを伝えたいということでした。目の見えない子どもの絵本に対する感想は「風が来る」もの、油絵はゴツゴツする、テレビはつるつるして何が面白いのかわからない。これらの子どもたちの声を参考に試行錯誤しながら作った最初の絵本には、サンドペーパーを使用しました。子どもたちにはわかりやすく好評でしたが、彼らにとって指は目の代わりとなるものです。指を怪我してしまえば何も見えなくなってしまうという保護者の声か



あり、サンドペーパーの使用は見直されました。それ以降は紙を貼る際も角を丸くするなど、指先の怪我には最新の注意を払っているそうです。平面に立体を描くのが絵本。凹凸をつけすぎると本が壊れやすくなってしまい、薄くしすぎると子どもたちから鋭い指摘があり、現在の形になるまで日々研究がなされてきました。

むつき会は長年続く団体です。主婦が中心となる団体でありながら長く続けられる理由は、区の職員の方の協力のおかげだと伺いました。活動中に要望を聞き入れ、すぐに対応してくれている区の職員の方がいてくださり、また、障害のある方とはしごになってもらうことで、どのような絵本が求められているのか情報を提供してもらえるのだそうです。

私が取材中に最も驚いたことは、弱視には様々の症状があり、出来る限りすべての症状に対応した絵本を考えているということです。大きくないと見えない、逆に小さくないとみえない、半分しか見えない…一人ひとり見え方は違って、より多く子どもたちに絵本をおもしろいものだと知ってほしいという想いが感じられました。



高齢者いきがい課

高齢者いきがい課では、65歳以上の区民を対象に介護予防事業としていきいき脳の健康教室(いき脳)を行っており、参加者アンケートによる満足度は96%、物忘れ予防になったかという質問には68.5%が効果ありと答えています。いき脳では「教養と教育」にかけて“**今**日用があること”と“**今**日行く所がある”ことが高齢者にとっては大切でモットーにしています。参加者からは、自分より年上の方が頑張っている姿を見て刺激を受けた、外出のきっかけになる、友人から元気になったと言われる、目的を持つ大切さに気付いた、生活にメリハリができたなどの声が寄せられています。

利用者から非常に人気のこのいき脳ですが、サポーターをシニアボランティアの方が務めています。これはボランティアする側もいきがいになったり、健康づくりになったり、支えになったりということがあるため、あえてシニアの方に依頼しているのだそうです。ボランティアとしてサポーターをしている方々に伺うと、自分の勉強になる、親世代の大切さを知った、家族を亡くしたがこれがあったから落ち込まなかったなど様々な返答をいただきました。サポーターをしてから変わったことを尋ねると、自分の体調管理に気を配るようになった、人それぞれ違う人生があり尊敬する気持ちがわいてくる、

相手のことを思いながら生活しているという答えがありました。いき脳の取材をしている際も、活気があふれており、本当に高齢者が集まっているのかと疑問に思うほどでした。サポーターと利用者の間に流れる空気はあたたかく、互いを気遣う様子も見てとれました。始めは若い世代と一緒にの方がより活気が出るのではないかと考えていましたが、参加者に近い世代だから感じることもあるのだと聞き、また、現場の雰囲気はこの目で見て、歳の近いシニアがサポーターを務めることの意義を感じました。

地域活動課 協働・ふれあいサポート係

地域活動課の協働・ふれあいサポート係では、区民との協働推進のために、活動資金の支援、情報収集・共有、活動場所の確保、ネットワークづくり、相談等を行っております。「協働」に関する業務として区民活動助成制度や協働事業提案制度、しながわすまいるネットの運営、協働推進室の運営、社会貢献活動しながわが挙げられます。また、区民が住み慣れた地域で安心して暮らし続けられるため「ふれあいサポート活動」を行っています。ふれあいサポートとは、地域で手助けを必要としている人々の日常生活を支援し、区民相互の助け合い活動を推し進めることを目的としています。

相談に関しては、専門相談員がNPOやボランティアを対象にこみゅにていぶらざ八潮で、毎週木曜日の午後1時から4時まで行う等、ボランティアやNPO法人とのパイプとしての役割も担っているとのことでした。

これまで私達は協働という言葉も聞いても、具体的にどのようなことか想像できませんでした。ですが、それは私たち学生が情報を与えられることを待っていたからであり、自ら情報を得るために行動に出ることが重要だと実感しました。実際に行動に移すことで、自分が知りたいと思っていた区の活動や取り組み以外の情報を得る機会となり、視野が広がります。私たち学生はあまり区役所の仕事に触れる機会が少ないので気付かなかったのですが、とても身近な存在であったのだと今回の取材を通して感じました。

(1～3ページ担当 日本語日本文学科3年

菅野・渋谷)



協働・ふれあいサポート係のみなさんと

地球 野 外 塾

私は清泉女子大学に入学するまで品川区についてのイメージは、都会でオフィスが多いというものでした。入学後、自然・環境分野のボランティアについて学ぶなか、子どもと自然との関わり合いに興味を持ちました。また、品川の魅力をもっと知り、その情報を発信していきたいということから、品川に拠点を置くNPO 法人地球野外塾取材し、都会に拠点を置きながらも自然と関わっていく手法などを伺ってきました。地球野外塾とは、1970 年代に早稲田大学探検部 OB が自主的に行ってた「子どもたちが自然で遊べる場所の提供」が基となり、2004 年に創立され設立 10 周年を迎えたNPO 法人です。中延に事務所があり、海老澤一彦さんと妻の真理さんが中心となって運営しています。

地球野外塾は自然体験活動を通して、参加する子どもたちにレジャーとして楽しんでもらうだけでなく、「気づきの機会」を提供しています。これは地球野外塾の大きな特徴で「けがをしない、けがをさせない、他人に迷惑をかけない」の3点について子どもたち自身に考えてもらってから活動に入ります。自由で居心地のよい場所を提供するため、子どもたちがやりたいこと、行きたいところに可能な限り制限を設けません。子どもたちの意思や個性を尊重することで「気づき」が生まれ、子どもたち自身の成長につながるということです。また子どもの様子を見守る親御さんも、わが子の新たな一面を見られたと嬉しそうに話す方が多いそうです。子どもたちが学校では学ぶことができないことを自然体験活動を通して考え、感じ、成長できる。そのような場を設けてくれる地球野外塾に是非参加してみたいかでしょうか。(地球市民学科1年 長倉、小田島、野口、菅原)

団体 HP : <http://www.k3.dion.ne.jp/~t-yagai/>

マ イ ス ク ー ル 八 潮

マイスクール八潮は、品川区立の小中学校に在籍し、不登校になっている児童生徒が通える教室です。校舎に入り階段を登ると、懐かしい小学校の長い廊下が見え、子ども達の明るい声が聞こえました。主任指導員の圖師田先生に迎えて頂き、まず体育の授業に参加しました。授業には指導員の方が 8 人ほどいらっしゃいました。大縄やバレーボールを、全員でやりとげることや運動を楽しむことを大切に行っているようでした。途中女の子、男の子達が「こんにちは！」と声をかけてくれました。お話は圖師田先生と心理相談員の秋山さんに伺いました。マイスクール八潮では、知識的な勉強が少ない分、集う楽しさを味わわせたいとお話されていました。誰かに追い込まれたり、人と比べるのではなく、自分が、生きていることを楽しむ心の充実感を感じさせたり、安心感を持たせたい。「心根」を大切にするという言葉が

印象的でした。子どもが大人になるまでに、自分の気持ちをちゃんと表現したり、夢や希望なども将来の目標を持ってほしいと願い、応援して下さる指導員の方が集まっているようでした。また、指導員の方から子どもへの指導だけでなく、子ども同士が先輩から後輩へ教室の雰囲気をつないでいるというお話も印象的でした。子どもが成長していく中で、どうしても前向きになれない時があります。その時こそ温かく受け止めてくれる大人に出会える事は大きな励みになるのではないかと思います。(地球市民学科1年 上平)

シ ル バ ー 大 学

品川区には、区内在住で60歳以上の方々のためのシルバー大学という学習プログラムがあります。そこには、3年制の「ふれあいアカデミー」(ふれあいコース1年目・いきいきコース2～3年目)と半期10回で趣味や実技を学ぶ「うるおい塾」の2種類があり、ふれあいアカデミーが講義なら、うるおい塾は部活動に当たります。ふれあいコースの講義内容は様々で幅広い教養を身につけることができ、例えばいきいきコースの歴史カテゴリーの中にはルネサンス期を学ぶ講座がありますが、これは芸術鑑賞するとき時代背景を知っていた方が面白くなるためプログラムに入れられたそうです。このようにシルバー大学にはシルバー世代の興味関心が高いものや暮らしを豊かにするプログラムが満載です。また、ふれあいコースの特徴として最後の授業でふれあい発表会をすることが挙げられます。これはクラスの中で班をつくり、各々の班で企画・調査をし、それを1班15分程度で発表する催しです。ただ授業をするだけでなく、班員と協力し発表にむけて準備することで、発表後は大きな達成感、何より同世代の仲間と楽しめる時間を得られるそうです。(地球市民学科1年 林、新里)

～御礼～

この度、品聞第7号の制作の機会を、私たち清泉女子大学在学学生に与えて下さり有難うございました。最初は手探り状態で不安でしたが取材を重ねて様々な発見があり、自分の考えの偏りや視野の狭さを見直す機会になりました。品川区役所の皆様、協働ネットワークの皆様に関心いたします。これからも品川区との繋がりを大切にしていきたいです。

「協働ネットワークしながわ」は、どなたでも入れる会員制で、施設見学会、学習会、情報交換会などを行っています。社会貢献活動をなさっている方、協働に関心のある方はお気軽にお問い合わせください。

また、品聞の問い合わせも下記までお願いいたします。

事務局連絡先: 地域活動課 協働・ふれあいサポート係

〒140-8715 品川区広町 2-1-36

☎:03-5742-6693 Mail: chikikat@city.shinagawa.tokyo.jp